

ローマ人への手紙 11 章 16-36 節 「神に愛された民」

1A オリーブへの接ぎ木 11-24

2A イスラエルの救い 25-32

3A 圧倒的な神の知識と知恵 33-36

本文

1A オリーブへの接ぎ木 11-24

16 初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです。

初物とは、アブラハム、イサク、ヤコブのことです。そして、粉は現在のイスラエルの民であります。これは、イスラエルの捧げ物の「奉納物」と呼ばれているものです(民数 15:17-21)もし、アブラハム、イサク、ヤコブを私たちは、神に選ばれ、祝福され、聖なる者とされていると信じているなら、イスラエルの民も神に選ばれて、祝福され、聖なる者とされているのです。聖書の中での話すと、現在のイスラエルを切り離してはいけません。つながっているのです。初物が聖ければ、粉の全部も聖いのです。同じように、根もアブラハム、イサク、ヤコブのことを指しています。枝とはイスラエルのことです。

そこでパウロは、神とイスラエルとの関係、神と異邦人との関係について説明します。聖書の中で、イスラエルはオリーブの木にとたえられています。そこで、パウロはオリーブの木によって、神とイスラエルとの関係、神と異邦人の関係を話しはじめます。

17 もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。

ここには、二本のオリーブの木が出てきています。一つは、台木に植えられた栽培種のオリーブの木です。もう一つは、自然に、雑草のように生えている野生種のオリーブの木です。栽培種のオリーブの木は、食べることのできるオリーブの実を結ばせますが、野生種は結ばせません。パウロは、イスラエルが、栽培種のオリーブの木であるとしています。根はアブラハムとイサクとヤコブです。アブラハムは血縁関係で、ユダヤ人になったものではありません。アブラハムは異邦人でした。けれども、「あなたの父と父の故郷を離れて、わたしが示す土地に行きなさい。」という神の呼びかけに応えることによって、イスラエルの父祖となったのです。つまり、イスラエル民族は神によって恣意的に造られたのであり、自然に出来あがったものではありません。ですから栽培種です。そして、その意図的な契約の中に入ることによって、神のいのちという実を結ばせるようになりました。

それに対して、異邦人は野生種のオリーブの木の枝です。自然に生じて、実を結ばせない木の枝です。つまり、神から遠く離れた民族であり、神の契約とはなんら関係のないものです。

けれども、神の一方的なあわれみによって、私たちは、オリーブの木につがれました。娘が悪霊に取りつかれて、イエスさまに追い出していただくように願い出たカナン人のことを思い出してください。イエスさまは、この女が叫んでいるのに、一言もお答えになりませんでした。けれども、その女はイエスさまの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください。」と言いました。けれども、イエスさまは、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくない。」と言われたのです。そこで女は言いました。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」パンくずをいただく、これが異邦人の救いであります。イエスさまは、この女の信仰をほめられました。

私たちも、この女のような信仰を持つことによって、イスラエルに与えられた祝福のおこぼれにあずかっているのです。祝福を受けるのは、当たり前のことではありません。神が、常軌を逸して異邦人にあわれみをおかけになったので、私たちはクリスチャンとなることができているのです。

そこでパウロは、「誇ってはいけない」と言っています。私たちがイスラエルを抜きにして教会を語るときに、私たちは神のいつくしみを忘れてしまいます。8章の最後において、パウロは、「これらのことにあっても、私たちはキリストにあつて、圧倒的な勝利者なのです。」と言いました。けれども、イスラエルについての神のご計画に目を留めないとき、私たちは必ず、「私たちはクリスチャンで特別である。」という驕りが出てきます。神はイスラエルを中心にして、物事を進めておられるのに、自分が中心であると勘違いするからです。そして、「クリスチャンであるから、こうあるべきだ。」という、信仰ではなく行ないによる歩みを始めてしまうのです。そこで、パウロは続けて、異邦人クリスチャンが抱く高ぶりについて、警告しています。

19 枝が折られたのは、私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。

17節において、異邦人は、栽培種のオリーブの木の枝の中に混じってつぎ合わされた、とありました。つまり、他にイエスさまを信じるユダヤ人はいるけれども、その中につぎ合わされたのです。切り倒されたイスラエルの枝は、あくまでも一部であり、全部ではありません。けれども、異邦人のクリスチャンが大多数を占めてきました。そして、もともと神の祝福を異邦人の教会が受けるようにされていたので、イスラエルは見捨てられたと考える過ちを犯してしまいました。

歴史を通して、キリスト教会は、メシヤを送ってくれたイスラエルを敬うのではなく、逆に迫害してきました。ユダヤ人にとって、十字架は虐殺と流血の象徴です。イエスという名は、迫害者たちが掲げている旗印でありました。それは、イスラエルは神にとっては特別な意味を持たず、教会が中心なのだと思い始めたからなのです。

20 そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

神は、イスラエルが不信仰になったので、さばきを行なわれました。祖国を失い、離散の民となりました。けれども、私たち異邦人も、イスラエルよりも、もっとたやすく神にさばかれえるのです。信仰によって立っていないかぎり、すぐにでもさばかれてしまいます。

22 見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。

私たちは、神の恵みを当たり前のように受け止めてしまいがちです。恵みが空気のように当たり前になっているので、神のいつくしみにとどまることを忘れてしまいます。そして、あたかも自分の行ないで救いを得ることができるように考えてしまうのです。黙示録には、大患難に入っていく教会についての預言があります。クリスチャンと言いながら、実はそうではない者たちが教会の中にふえて、そうした人たちが大患難の神のさばきの中に入ることが預言されています。それは、神のいつくしみにとどまっていないからです。つまり、家のテーブルの下にいて、パンくずをもらっている小犬にすぎないことを忘れるからです。

23 彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わすことができるのです。24 もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につがれたのであれば、これらの栽培種のもの、もっとたやすく自分の台木につがれるはずで

ユダヤ人が救われる条件は、異邦人と変わりません。彼らも自分の罪を認めて、イエス・キリストを自分の救い主として信じることによって救われます。

私たちがつがれたのは、「もとの性質に反している」とあります。野生種のオリーブの木の枝を栽培種の木につぎ合わせても、実は何も実を結びません。逆に、栽培種のオリーブの木の枝を、野生種につぎ合わせると実を結ぶそうです。ですから、パウロは、わざといつもとは逆のことを話して、いかに異邦人がつがれたことが不自然であるかを、強調しています。イスラエルがイエスさまを救い主として受け入れることは、いかに確実なことであることを示しています。

2A イスラエルの救い 25-32

そこで、パウロは、そのような救いがいつ起こるかについて話します。

25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。

パウロは続けて、異邦人信者に対して語っています。イスラエルが見捨てられて、自分が神にながれているのだ、という驕りをなくするために、今から奥義を話します、とパウロは言っています。

26 その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

イスラエルがかたくなになっているのは、ずっとではありません。異邦人の完成の時までだとあります。つまり、神があらかじめお救いになるようお定めになっている異邦人がすべて救われるときです。その時が終わると、今度は、神はイスラエルをみなお救いになるのです。

ダニエル書9章によると、終わりの時に、イスラエルはある者と契約を結びます。それによって神殿を立てることができます。けれども、3年半後に、その者は、神殿の中に入って、自分こそが神であると宣言します。反キリストの現われです。そして、かつてなかったほどの大迫害をユダヤ人に始めるのです。イスラエルのうち、3分の2は死に絶えますが、残りの3分の1は、救ってくださる方、メシヤを願い求めます。そのときです、イエスさまが天から聖徒たちとともに来られて、イスラエルのために戦われるのです。キリストに反抗する世界の軍隊、また反キリストは、ことごとく滅ぼされてしまい、イエスさまはご自分がメシヤであることを、イスラエルの民に示されるのです。

そして、ゼカリヤ書に、このような預言があります。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。(12:10)」先祖が拒んだイエス、この方がメシヤであることを悟るのです。そして、激しく泣いて、悔い改めて、イエスさまをお迎えし、救われるのです。

28 彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、先祖たちのゆえに、愛されている者なのです。

あなたがたのゆえに、とは異邦人である私たちのことです。彼らが福音を拒んだため、私たちは福音を信じることができるようになりました。けれども、先祖アブラハムのゆえに、彼らは今もって愛されているのです。アブラハムに約束された、土地の所有に、子孫の繁栄、国家の建設などは、すべて彼らのものとなります。そして、何よりも、霊的な救いを必ず手にすることができるのです。アブラハムのゆえに、そうなるのです。

29 神の賜物と召命とは変わることがありません。

旧約に書かれている、イスラエルに対する契約と約束は変わることはありません。これは、イスラエルが見捨てられていないこの結論です。そしてパウロは、このような神のご計画にある、神のあわれみについて次に述べます。

30 ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であったが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、31 彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。32 なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。

私たちがかつて神に不従順であったというのは、偶像に仕えていたということであります。そして、彼らの不従順とは、イエスをメシヤとして受け入れないことで、そのために私たちに神のあわれみが注がれました。そして、今、私たちは救いを手にしたのですが、私たちの証しによってユダヤ人も救われるように神はしてくださしました。

神は分け隔てなさらない方です。神のご計画には、地上のすべての民族がご自分のあわれみのもとに入ってほしいという願いがありました。けれども、あわれみを受けるためには、すべての人が不従順であることが証明されなければいけません。そこで、神はまずイスラエルをご自分の民となさいました。そうすることによって、異邦人である私たちが、偶像に仕える不従順な者とされました。今度は逆に、イスラエルが福音に敵対するように、彼らをつまずかせて、私たちが代わりに福音に従順になるようにされたのです。こうしてすべての人があわれみを受け、すべての人が不従順のうちに閉じ込められました。

3A 圧倒的な神の知識と知恵 33-36

ここまで話を聞いて、私たちも、次のパウロの言葉に共鳴するのではないのでしょうか。33 ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

神が、イスラエルを通してもっておられる計画、またその背後にある神の知恵は、あまりにも広く、深く、測り知りがたいものです。

34 なぜなら、だれが主のみごころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。

神が考えておられることは、私たちの思いをはるかに越えているので、だれにも知る由がありません。神のご計画は、私たちが理解できるような単純なものではありません。

35 また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。

私たちが神に何か影響力を与えて、神から何かをいただくことは決してできません。すべてが神の思うままになっているのです。

36 というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

ほんとうに、アーメンと言うことしかできませんね。すべての原因は神であり、その過程も神であり、目的地も神なのです。

こうして、私たちの思いを超えたところにある、神の深いみこころを知りました。もしローマ書 9 章から 11 章までが抜けていて、8 章からそのまま 12 章につながっていたとします。そうすると、私たちは、次に出て来るパウロのことばがわからなくなってしまいます。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。(12:1)」神のあわれみがわからなくなるのです。12 章から、クリスチャン生活へ具体的な勧めが始まりますが、そのすべての土台である神のあわれみが分からなくなります。ですから、大事なのです。イスラエルが神によって選ばれたことを知ることによって、私たちは、神の選びについて悩み、神のあまりにも豊かな知恵に驚き、ただ神だけの世界を知ることができるのです。その認識があって、クリスチャン生活があります。それは献身に特徴づけられた生活ですが、自分の行為ではなく、すべてが神、すべてがキリストの生活であることを知ります。